

Title	Gallia 60号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 60 p.117-p.118
Issue Date	2021-03-06
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79403
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

卒業論文要旨

ヴェルレーヌの詩における楽器の表象
と機能

竹 田 華 奈

本論文では、ヴェルレーヌの初期詩集における楽器描写が果たす役割や効果を考察し、続いて、初期詩集の中から詩集『艶かしきうたげ』に着目し、ヴェルレーヌの楽器描写の特徴を分析した。

第一章では、『土星の子の歌』、『艶かしきうたげ』、『やさしい歌』、『無言の恋歌』にみられる楽器描写を、比喩表現として用いられる楽器、詩の中で実際に演奏されている楽器、擬人化されている楽器の三種類に分類し、それぞれ、ヴァイオリン、ギターとホルン、ファゴットを取り上げてその効果について考察した。これらの楽器描写には、それぞれの楽器の音色・形・色といった特徴によって、情景と人物を結びつける働きがあると考えられる。

第二章では、『艶かしきうたげ』に着目し、はじめに、本詩集におけるヴァトーの影響について確認した。《シテール島への船出》や、ゴンクール兄弟『18世紀美術』におけるヴァトー作品についての記述には、本詩集に共通する舞台設定や人物描写がみられる。このことから、ヴェルレーヌはこれらの作品を通してヴァトーの影響を受けたことが確認できる。続いて、ヴァトーの雅宴画における楽器描写と、『艶かしきうたげ』における楽器描写を比較することで、ヴェ

ルレーヌの楽器描写の特徴を分析した。『艶かしきうたげ』における楽器描写は、楽器を弾く人物が男性に限られている点や、夜の光景を舞台としている点が特徴的であった。また、ヴァトーの雅宴画に多く描かれたギターの他に、マンドリンの描写を取り入れた点には、詩にうたわれる情景を聴覚からイメージさせようとする試みを読み取ることができる。

以上、ヴェルレーヌの初期詩集における楽器描写には情景と人物を結びつける効果があり、『艶かしきうたげ』における楽器描写については、ヴァトーの雅宴画の忠実なエクフラシスというわけではなく、ヴェルレーヌ独自の詩学に基づく描写がみられると結論付けた。

アゴタ・クリストフ『悪童日記』における双子と家族
—人物の呼称を手掛かりに—

羽 山 副 武

本論文では『悪童日記』において双子が家族とどのような関係を築いているかを、呼称を分類の手掛かりとして、双子と家族の個々の成員、双子と家族全体の関係に分け、物語の自伝性を加味しつつ分析し、その意味を考察した。

第一章では文体的特徴として、作品の無名性と文体の簡素さを取り上げ、全体主義下での、個を剥奪されたハンガリーの人々の悲痛な思い、無力感等が、戦争という物語の背景を際立たせていること

を確認した。

第二章では、まず「nous」で自称する双子間の同一視に触れ、双子が外界と切り離された、nous による世界を作り上げ、苛酷な戦時下での生活と向き合う様を追った。次に、外界に置かれた双子の家族を、「vous と tu の使い分け」として父と兎っこ・従姉、「双子への愛称と蔑称」として母と祖母に分類しこれを対比させ、それぞれの双子との関係の違いから、外界の中の家族間でも双子との距離の差異があること、そして双子は父や母のような、権威主義的な存在を否定していることを導いた。さらに、家族全体と双子の関係を見たとき、「大文字」で括られた家族全員の死に、双子が関与していることを指摘し、双子が、家族の死を即物的に捉え、乗り越えるべき存在とみなしていることを明らかにした。

第三章では、自伝的小説であることを踏まえ、まず、クリストフの家族との関係を個別的に分析し、双子のそれと比較した。ここで、母の描かれ方が対照的であることに焦点を当て、クリストフ自身の反権思想の現れを示した。最後にクリストフと家族全体の関係を整理し、家族との別離に苦しみ続けたクリストフが、理想的存在として双子を仕立て、幼少期の生き直しを試みていると推察した。

クリストフは、この作品を政治的思想と結び付けられることを好まなかったが、双子、そしてクリストフ自身と家族個々人との関係を考察すると、彼女の反戦、反権威主義の思想が、家族全体との関係から見えた幼少期の生き直しの試行とともに浮かび上がってくることを確認し、結論とした。